

An Essay on Uzbekistan

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-03-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松本, 耿郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029393

ウズベキスタン随想

松 本 耿 郎¹

1. ウズベク語とタジク語

今年（2022年）、およそ30年を隔てて2度目のウズベキスタン訪問をした。最初の訪問は、ソ連崩壊後の1993年12月のことで、一人旅だった。冬だったので大気は冷え込んでいた。今回は大野旭静岡大学教授と連れ合いの松本ますみ室蘭工業大学教授と一緒に三人の旅だった。大野教授はウズベク語に通じているので非常に助けられた。大野教授はウズベキスタンの文化人類学研究センター長のアドハムジャン氏と旧知というご縁もあって、アドハムジャン氏が家族ぐるみでわれわれ一行に付き添ってくれた。筆者はタジク語がある程度解るので一行の役にたてるかと思っていたが、タジク語を話す人にほとんど会うことがなかった。その点、筆者は一行の足手まといになってしまった。それと同時になぜタジク語が聞こえなくなったのかという疑問が湧き起こった。

今回の旅は八月の夏だったので非常に暑かった。日中、摂氏45度ほどに気温は上がっていた。この30年間で自分自身もウズベキスタンもすっかり変わっていた。僕は高齢者になり体力も衰えてきた。二十歳代に酷暑の北アラビアを旅したころの体力や順応力はなくなっている。この暑さは老齢の身には厳しい。

30年前の訪問は1991年の独立の2年後、1993年の冬のことで、そのとき案内をしてくれたタシケント大学東方語学部ペルシア語科の教授ユルダシェヴァ氏がブレジネフ時代はよかったと言っていたのが印象的だった。独立によりソ連邦内の物流網から切り離され生活物資が不足していたので彼女はそうだったのだろう。道路も鉄道も整備されていなかった。対照的に、この夏に見たウズベキスタンは物資も豊富で、若者が多く、活気に満ちていた。中国、米国、EU、韓国などの資本がさかんに流入しているからという。日本もウズベキスタンともっと交流を盛んにし、ウズベキスタン人の元気をもらえばよいと思った。

ウズベキスタンの人々はさまざまな理由で日本に対して強い親近感をもっている。昔、日露戦争では、ウズベク人の嫌いなロシアに幸運が重なって日本が辛勝したり、先の大戦直後にソ連に抑留された旧日本兵が1966年の大地震にも倒壊しなかったタシケントの頑丈なナヴァーイー大劇場を建設したりしたので日本に親しみを抱いている。この劇場はウズベキスタンの人々が敬愛するウズベク語の元となったチャガタイ・トルコ語の文人アリーシール・ナヴァーイー（1441–1501）を記念して建設されたものである。アリーシール・ナヴァーイーは文人兼政治家で慈善事業を盛んにおこなった。このため人々から慕われている人物である。

この人物の遺徳なのかウズベキスタンの人々は困っている人に優しい。ウズベキスタンにはスターリン時代に大規模なラーゲリ（主として日本人抑留者を閉じ込めた施設）がいくつもあった。ラーゲリでは過酷なノルマに基づく重労働に従事させられて、約1割の日本人抑留者が命を落とした。あるいは親ソ連の日本人を造るために、日本人の中にアクチヴと呼ばれた人びとを育成し、反革命・反動とみなされた日本人抑留者を吊し上げ陰惨なリンチを加え死に至らしめたこともあった。監督者のロシア人はそういうリンチを見て見ぬふりして放置した。そんな劣悪な状況で栄養失調や病気に苦しむ日本人たちにウズベクの人々は食べ物を差し入れたり防寒具を与えたりして親切にした。これもアリーシール・ナヴァーイーの遺徳の表れなのかもしれない。ウズベク人のこうした親切に日本人たちは各自がその特技をいかして返礼をした。このようなウズベク人と日本人の交流があったのでウズベク人は日本人に親し

¹ 松本耿郎（まつもと あきろう）・聖トマス大学名誉教授。

みをもっているのである。ましてやウズベク人が最高に敬愛するアリーシール・ナヴァーイーを記念する大劇場を日本人が創ったのだから彼らの日本人に対する親近感には特別なものがあるのだ。さらにアングレンのように日本人抑留者によって基礎が建設された街もある。

このため日本人に対して特別な親しみを抱いてくれているウズベク人がいる。日本語の学習も盛んなようだ。空港のグランドホステスたちは日本人を見ると簡単な日本語のあいさつをしてくれる。現代の日本人は先人の艱難苦心の結果として蒔かれた友好の種をもっともっと大切に、ウズベキスタン・日本の友好の花を咲かせるべきだと思う。人権蹂躪の中国共産党独裁政権の「一帯一路」構想などにウズベキスタン・日本の友好の絆を横取りさせてはならない。ウズベキスタンの人々は新疆ウイグル自治区における人権弾圧・イスラーム文化破壊を深く憂いている。ウズベキスタンには新疆ウイグルから移住してきたウイグル人やその子孫も住んでいるし、何よりもウズベク人とウイグル人は言語も文化もほぼ同じだからだ。

ところで前述のように30年前はウズベク語とタジク語両方がよく聞こえてきたのだが、今は圧倒的にウズベク語話者が増えている。今回はボハラで古本を売っていた老人とタジク語で話すことができたのが唯一の機会なのであった（図1）。

タシケント考古学研究所のファルハード・マクスードフ氏によると、1999年ころから毎年50万人ほどウズベク語話者が増えるようになり、今日では国民の83パーセントがウズベク語話者になっているという。ちなみにウズベキスタンのボハラに生まれた大文学者サドリッディーン・アイニー（1878-1954）の自伝小説『ボハラ』も現在はオリジナルのタジク語版でなくウズベク語に訳されたものが読まれている。サドリッディーン・アイニーはウズベク語とタジク語の二カ国語を使用しながらも近代タジク語文学の基礎を確立した文豪である。筆者としてはウズベキスタンの人々は彼の作品をタジク語で読んでもらいたいと思う。なぜなら彼の自伝小説『ボハラ』にはハーフェズエ・シーラーズィー（1326-1390）のペルシア語神秘主義抒情詩などがふんだんに引用されているからである。

もともとタジク語とペルシア語（ファールシー）の間には言語としての境界線が曖昧模糊としていた。しかしロシア帝国を継承したソヴィエト政権のスターリンが1924年に「民族境界画定」を実施し、タジク共和国が創設されるとタジク・アイデンティティーが造り上げられた。キリル文字でタジク語が表記され、話しことばをそのまま表記するようになると、ペルシア語とタジク語はそれぞれ別々の言語となってゆく。もちろん、ウズベク語もタジク語から独立して完全に独立言語となっていく。こうした経緯で、タジク語は変貌を遂げた。そのため、現代タジク語には現代ペルシア語（ファールシー）にはない現在進行形のような分詞表現も確立した。たとえば、「来つつある人」（*mi-omadegi âdam*）のような表現である。

もともとウズベク語はトルコ語系の言語であり、タジク語はイラン語系の言語である。それぞれが別々の歴史的背景と言語構造を持つ。しかし何世紀にもわたってウズベキスタンはペルシア・イスラーム文化の影響下にあったのでペルシア語、アラビア語由来の単語がウズベク語には多く混入している。面白



図1 タジク語を話す老人と筆者（右）

いと思ったことは、公衆トイレに nejâtkhone（ネジャートホーネ）というプレートが付いていることだった（図2）。「ネジャート」はアラビア語の「ナジャート」のペルシャ語訛りで「救済」の意味、「ホーネ」はペルシャ語の khâneh がタジク語風に訛った言葉で「家」の意味である。つまり公衆便所（ネジャートホーネ）は直訳すると「救済の家」なのである。ボハラ生まれの哲学者イブン・スィナー（980–1037）の著書の一つに *Kitâb al-Najât*（救済の書）というアラビア語の著作がある。これはもちろんイスラーム逍遙学派（アリストテレス学派）哲学の入門書であって公衆便所の説明書ではない。



図2 救済の家という名の公衆トイレ

2. スーフィズム（タサウフ）

ペルシア語文化はメソポタミアからイラン高原、中央アジアに広がっている一大文化である。この文化の核心となるものがペルシア語詩である。そしてペルシア語詩の中心となるのが二句一対の連行形式（マスナヴィー）の抒情叙事詩である。この詩形の代表的作品はジャラルッディーン・ルーミー（1207–1273）のスーフィー叙事詩『精神的マスナヴィー』である。しかしその基本形である『五部作』を造ったのはスーフィー詩人ニザーミー・ガンジャヴィー（1141–1209）と言ってよい。アミーレ・ホスロー・デフラヴィー（1253–1325）もアリーシール・ナヴァーイーもニザーミー・ガンジャヴィーの『五部作』を手本にしている。アリーシール・ナヴァーイーの友人であるアブドッラフマーン・ジャーミー（1414–1492）もまたニザーミー・ガンジャヴィーの『五部作』を手本としている。

しかしこのペルシア語詩文化が現在のかたちで中央アジアに根付いた原因の一つはペルシア語文化がサマルカンド — ヘラート — デリーの南北交易ルートを通じて北インドに根付いてそこに開花したことにありといえよう。この南北交易ルートを使って古くから中央アジアと北インドの間を人、物、文化が盛んに往来していた。唐の玄奘三蔵法師もこのルートでインドへ行った。デリー・スルターン諸王朝やムガル帝国のようなイスラーム王朝がインドに成立したのもこのルートがあったためである。このルートで古くはアミーレ・ホスロー・デフラヴィーや少し時代が下がるがビーデル（1644–1721）などのインドのペルシア語抒情神秘主義詩がサマルカンド、ボハラ、フェルガーナ地方に輸入された。このためサファヴィー朝以降のイランのペルシア文化よりもインドのペルシア語抒情神秘主義詩がタジク語を話す人々の精神に深い影響を与えることになったのである。

それはウズベク語に対しても同様で、ウズベク語の元となったチャガタイ・トルコ語の文人アリーシール・ナヴァーイーのチャガタイ・トルコ語の韻文作品にもアミーレ・ホスロー・デフラヴィーの影響を認めることができる。その結果タジク・ウズベク語世界はイラン・ペルシア語文化よりもインド・ペルシア語文化に深く影響されることになる。30年前にサマルカンド大学のペルシア語学科をたずねたところ、学科の教員たちはみんなアミーレ・ホスロー・デフラヴィーの研究をしていると言っていた。

このような結果を招いたのは13世紀初頭のデリー・スルターン諸王朝の成立とティムールの子孫のバーブルが1526年に北インドに覇権を確立したことも影響している。これにより、北インドと中央アジアの

タジク語世界の関係が決定的に強まった。他方、1501年にイランに十二イマーム・シーア派イスラームのサファヴィー朝が成立し、周辺のハナフィー派イスラーム諸国と対立したため、タジク語世界とサファヴィー朝イランとの関係が文化的に疎遠になった。サファヴィー朝それ自体は十二イマーム・シーア派系のスーフィー教団が巨大化し王国化したものである。しかしながらこのスーフィー王国はナクシュバンディー教団やクブラウィー教団のような他の種々のスーフィー教団に対しては冷淡だった。現在のイラン・イスラーム革命政権もまたシャーネウマティラー教団をはじめ国内のスーフィズム運動を白眼視している。

これと逆に、ティムール以来タジク語世界では種々の流派のスーフィー文化を厚遇していた。とりわけティムールの後裔の一人アブー・サイード（1424–1469）はスーフィー教団ナクシュバンディー派の導師ハージェ（ホージャ）・アフラール（1404–1490）を宮廷に招聘し、その教義と実践を重視し保護した。これもタジク語とペルシア語（ファールス語）が分離する一因となったと思われる。そして、これと時を同じくしてトルコ系のウズベク人が現在のウズベキスタン地方（マー・ワラー・アンナフル「アムダリアを越えた地」）を征服した。その結果、ウズベク語話者の数がこの地方で増加していった。

タシケントのティムール博物館の展示ではティムールをウズベキスタン建国の祖のように見せている。しかし、ウズベク族のシャイバーニー・ハーン（1451–1510）が、ティムール家の版図を奪取し、この地にウズベク人の国をつくったことを勘案すれば、ティムールを現在のウズベキスタン建国の鼻祖と呼ぶには少々無理があるような気がする。しかしサマルカンドをモンゴルの破壊から復興して中央アジアを世界の中心にしようとした人物はティムールであることには間違いない。タシケントのイスラーム文化博物館には第三代ハリーフア（カリフ）・ウスマーンの命で編纂された『コーラン（クルアーン）』の写本が保管されている。これは世界最古の『コーラン』の写本の一つでしかもティムールの収集品の一つであるという。

現在のウズベキスタンでは社会主義革命で破壊されたイスラーム文化の再興が盛んにおこなわれている。ただし、この場合のイスラーム文化の再興とはスーフィー文化の再興であるようにみえる。最近世界の各地でみかける奇怪な男性同盟に基づく原理主義的イスラームや殺伐とした戦士文化の再興ではない。スーフィー文化の核となるスーフィズム（タサウフ）とは、人間がアッラー（唯一至高の存在者）と親密な関係（ワラーヤ）を獲得するための方法論と実践である。スーフィー文化とはこの方法論と実践に関わる文学、音楽、舞踏、美術、衣装などの総体である。

3. フェルガーナ

今回はじめてフェルガーナのコーカンドを訪れた。ここはかつてコーカンド汗国の首都だった。帝政ロシアの攻撃により滅亡したコーカンド汗国最後の汗（ハーン）の宮殿が修復され博物館となって公開されていた（図3）。この地域は帝政ロシアを継承したソ連共産主義革命に反対する抵抗運動が長く続けられたところである。いわゆるバスマチ運動（イスティقلالチリク・ハラカティ〈独立主義運動〉）の中心地だった。それだけに共産主義者によるイスラーム



図3 コーカンド汗国の宮殿

教徒虐殺事件も頻発した。

ソ連崩壊後はスーフィー運動も復興し、活発化する。とりわけこの地方ではナクシュバンディー教団の分派ハーリディー教団の宣教活動が盛んだった。この教団の特徴は『コーラン（クルアーン）』の語句に忠実であろうとすることである。このため、ある程度ワッハーブ主義と親和性をもっている。ワッハーブ主義そのものもどこからか浸透してきてスーフィー運動と紛争を惹き起こすこともあった。しかし、今日ではフェルガーナのワッハーブ主義は下火になっているようだ。ワッハーブ主義はもともとアッラーと人間の親密な関係を重視するスーフィズムと激しく対立する。ワッハーブ主義においてはアッラーと人間を含む被造物とは隔絶すると見なし、アッラーに人間を含め被造物が近づくすべはないと考える。このためワッハーブ主義では「なにものもアッラーに似たものはない *laysa ka-mithli-hi shay'*」という『コーラン』に頻出する語句を重視する。人間はひたすらアッラーの命令と禁令を遵守するのみである。

これに対してスーフィズムはアッラーと被造物との密な関係を軸にした世界観に基づき人間とアッラーとのより良き関係を人間の側から模索する。それゆえスーフィズムにおいては「我は隠れたる宝なりしが知られることを愛したために万物を創造した。その結果我は知られた。 *kuntu kanzan makhfiyan fa aḥbabtu an u'rafa fa khalaqtu al-khalaqa li-kay u'rafa*」という「聖なる伝承」が重視される。スーフィーたちはこの「聖なる伝承」にアッラーの世界創造の根源に胚胎する愛と知を認めてアッラーと被造物との親密性を信じている。フェルガーナのハーリディー派がスーフィズムであるかぎりワッハーブ主義とは根本的に相いれない。スーフィー運動が盛んなフェルガーナでワッハーブ主義が下火になったのも当然のことである。

ところでフェルガーナのコーカンドは地図で見て山の中の街のように想像していたが、実は広々とした平原の中の街だった。昔の中国の史書に出てくる大宛国はこのあたりにあった国である。放牧地には大きな馬が放たれていた（図4）。この馬たちはひょっとしてあの汗血馬の末裔かもしれない。三国志の董卓や豪傑呂布や関羽の愛馬だった赤兔馬も汗血馬だったという人もいる。馬は優しい目をして可愛い動物である。あんな可愛い動物を戦場に引き回す人間はなんと罪深い生き物だろう。日中戦争でも沖縄戦でも馬たちは重い大砲を引かされながら銃弾や爆弾の犠牲になっていった。人は動物に対する残酷な行いの赦しをひたすら至高者の慈悲に求めるしかない。



図4 汗血馬の子孫？

4. ボハラ

コーカンドからタシケントにいったん戻り、タシケントから高速列車でボハラへ移動した。30年前にボハラの旧市街に来たときはさびれた街だと思った。カラーン・マナール（巨大光塔）が目をはきだけだった。あとは低い屋根の日干し煉瓦の家屋がうねうねと街並みを造っているという印象だった。あのとき旧市街の小さな通りに小さな美術館があったのでそこにふらっとはいつてみた。ヴィンコフという

レーピン派の画家の絵が沢山展示されていたのが印象的だった。青い空の下、茶褐色の家が静かに立ち並ぶ。昔のボハラを描いた風景画や、憂いをたたえた表情のボハラの市井の人々の肖像画が展示されていた。寂しい冬のボハラにふさわしい美の世界だと思った。

この夏訪れたボハラは陽光燦爛とふりそそぐ真夏のせいもあって以前とうってかわった印象だった。旧市街のアルクと呼ばれる城塞の修復は進み、社会主義時代の反宗教政策で破壊され見捨てられていたマスジド（礼拝堂）（図5）やマドレセ（宗教学校）やハーネカー（スーフィー道場）が修復され、世界中からの訪問者も多く賑わっていた。

通りは整備されて自動車が走りまわっていた。走っている自動車はロシア製のラダは少なくアメリカ製のシボレーが多いのが印象的だった。シボレーはウズベキスタンに現地工場があるという。ガソリン車とメタンガス車が半々くらいの割合で走っている。

アルクの前の広場には飾り付けられたふたこぶラクダが客待ちをしていた。北アラビアではひとこぶラクダが多いが、内陸アジアではふたこぶラクダが多い。ラクダものんびりした優しい顔をしている。暑いにもかかわらず若い人たちが土産物の細密画や陶器や金物細工を売ったりしていた。30年前と違って今のボハラは活気に満ちている。季節のメロンや西瓜を売る商人は明るい表情だった。



図5 ボハラの修復されたマドレセ



図6 ハーजे・バハーウッディーン・ナクシュバンド廟

ボハラ近郊のハージェ・バハーウッディーン・ナクシュバンド（1318－1389）の霊廟を訪ねた（図6）。ここも30年前とはすっかり様変わりしていた。

30年前に来たときは寒々とした荒野の中にさびれた霊廟がぽつんと一つ建っただけだった。冬の寒い季節だったせいか訪れる人もまばらだった。現在ではハージェ・バハーウッディーン・ナクシュバンドの大きな霊廟を中心にして、それに付属するマドレセ（イスラーム宗教学校）、マスジド（礼拝堂）、ハーネカー、墓地などの施設が立ち並んでいる。ウズベキスタン政府のいうには、ハージェ・バハーウッディーン・ナクシュバンドの霊廟はイスラーム世界でメッカに次ぐ第二の聖地という。ハージェ・バハーウッディーン・ナクシュバンドの一大スーフィー複合施設を見ると、スーフィー的イスラームの復興が実行されようとしていることが解る。レーニンやスターリンにより破壊された中央アジアのスーフィー文化を再建し、かつてティムールが構想した多様性を総合した国を造ろうとしている。それはスーフィズムの「存在一性論」の世界観の具体化である。

特定のイデオロギーに捉われず多様な思想が共存して纏まり、互いに刺激しあって共栄する社会の実現を目指していると思われる。それは一多相即・相入の存在一性論の世界観と親和性を持つ。

ティムールはモンゴル遊牧文化を自らのバックグラウンドとしながらも、イスラーム文化に深い理解をもっていた。彼は様々の思想に対し寛容な態度で臨んだ。このことはティムールに関わる次のような逸話によく現れている。この逸話はティムールの宮廷にいたアリー・ブン・ムハンマド・ジュルジャーニー（1339–1413）とサアドッディーン・タフターザーニー（1322–1390）の間で行われた討論会の概要を示していると同時にティムールの宮廷の寛容な雰囲気を表していると思うので紹介する。この逸話はジュルジャーニーの著作 *Risālat al-wujūd*（存在の書簡）の巻末に出てくる²。

5. 逸話

ある時、思弁神学派のある学者が絶対一元論のスーフィー学派のある学者が会合で一緒になり、絶対一元論について両者の間で議論がおこなわれた。第一の（思弁神学の）学者は「犬や猫の中に現れる神なるものを私は厭う」といった。第二の（スーフィー学派の）学者は「犬や猫の中に現れないような神を私は厭う」といった。会合の出席者たちは二人の学者のうちのいずれかが不信者にちがいないと考えた。しかし、（列席の）長老達のあるものが両者の言葉を解説して次のようにいった。「思弁神学の学者は犬や猫を限りなく卑しいものとして、そういうものと交わることは完全な欠陥であると考えているのだ。すなわち、彼の言葉の意味することは、不完全な神なるものを厭うということだ。さらにスーフィー学派の学者は、太陽について言われたことにもとづけば、そういう交わりはなんら欠陥ではなく、むしろ犬や猫の中に現れないとしたら栄光の真理の存在の恵みが包括的ではないことになり、それどころか不完全になってしまうと考えているのだ。すなわち、スーフィーの学者の言葉の意味もまた不完全な神を厭うということなのだ、無論、神にたいして不完全者という言葉は適切ではない。してみると、彼らは神を厭わしく思っているのではない。両者のいずれにも不信ということはあてはまらない。」

文中で「犬や猫の中に現れる神なるものを私は厭う」と言ったのは思弁神学者サアドッディーン・タフターザーニーである。そして「犬や猫の中に現れないような神を私は厭う」と言ったのはスーフィー学派の学者アリー・ブン・ムハンマド・ジュルジャーニーである。思弁神学者サアドッディーン・タフターザーニーはマートゥリーディー派の護教神学者、アリー・ブン・ムハンマド・ジュルジャーニーは、元は十二イマーム・シーア派に属していたが存在一性論派のスーフィー学者である。両者の主張をまとめて調和させた長老はニシュ（A.D.Knysh）によればムウタズィラ神学者のヌウマーヌッディーン・ハーリズミーであったとされる。

文中の「太陽について言われたこと」という語句はこの逸話の一つ前の章にある「太陽の光は紅玉にも汚れたものにも降り注いでいるのである」という言葉に続く文章を指している。それは「不浄のうえに光が降ろうとも光は不浄になることがない…光は場所が汚れているからといってその光にいかなる欠点も生じることがない…また、紅玉に降りそそぐ光だからといってその高貴さが増すというものでもない。むしろ、光はどちらの場においてもそれそのままであり、それ自身の気高さにとどまっているのである」³というものである。ティムールの宮廷ではこのようにさまざまな学派の人々が自由に討論していたのである。

こういう自由な討論はティムールの寛容さに支えられていた。この寛容さは、光は汚物にも紅玉にも降りそそぐという考え方に通じる。光を存在という言葉に置き換えれば、そのまま存在一性論の世界観となる。ティムールの思想的寛容さは存在一性論の世界観に裏打ちされているといえるだろう。ティムールは文字を書けなかったけれども学者や文人との対話を好み、それらの人々の思想をよく理解したとい

² 松本耿郎編著『ペルシャ存在一性論集』2002年 有限会社ビブリオ発行 pp.110-111。

³ *ibid.*, p.109

われる。こういう対話を通じてティムールは自らの思想的寛容性を培ったと考えられる。

現代のウズベキスタンがティムールを国の礎を定めた人として讃えているのはティムールがペルシア・イスラーム文化を復興させた人物であり、同時に自由と寛容の精神の基礎を据えた人物でもあるからである。すなわち現代ウズベキスタンはティムール時代の繁栄と自由と寛容を復活させたいがゆえにティムールをあたかも建国の祖のように讃えているのであろう。